白木峰高原

こどもの城

どきどき
わくわく
のびのび

諫早市 こどもの城
実績報告書 Vol.1

はじめに

新しい時代に対応して誕生した本市は、「ひとが輝く創造都市・諫早」を目標にかかげ、諫早市総合計画を策定し、数々の施策に取り組んでいます。

平成21年３月20日に開館した「こどもの城」は、その土台づくりプロジェクトの一つとして、準備段階から多くの市民の方々の力によって、作られてきました。

開館後１年を迎え、子育てや教育に関する現代的な課題とともに、そのような課題にどう向き合ってきたのか、ここに成果をとりまとめました。

こどもの城は、子どもたちの生きる力を培うことを目的とした事業であり、教育に関すること、福祉に関することなど、本事業に期待される市民の思いは多岐にわたります。一般に、子育てに正解はないなどと言われますが、家庭や地域が持っていた機能の一部を本事業が担うこともあるでしょう。

今後も実践を積み重ねて行く中で、市民の思いを感じ、必要な取組を進めてまいります。

平成22年３月

諫早市長　宮　本　明　雄

開館後１年で見えてくるもの

利用者数　140,121人
（平成22年２月28日現在）

こどもの城は、平成21年３月20日に開館し、上記の利用者を受け入れることができました。これは、全国の青少年教育施設など類似施設の利用実績と比較しても、多い数です。

また、自らボランティア活動をされ、多くの市民が運営に参加されました。延べ人数は566人にのぼります。

一方で、こどもの城は、子どもたちが生きる力を培うことを目的にしていますので、利用者に満足することなく、今後も研究を重ねていきます。

開館以来、多くの利用者の方々とふれあい、語る中で、子育てや教育の現代的な課題も浮き彫りになってきました。課題の解決のためには、大人が子どもに関わる充分な時間が必要だと感じます。

ここでは、そのような課題をＡ～Ｇの頭文字にしてまとめてみました。併せて、こどもの城の取組について紹介させていただきます。

Adventure
自分との出会い

Aの章では、Adventureをキーワードにしてみます。

Adventure（アドベンチャー）とは、一般的に日本語では「冒険」と訳され、漢字で書くと、険しく冒すとなります。1990年代から、日本にアドベンチャー教育の手法を紹介し、普及に努めてこられた難波克己先生（現：玉川大学心の教育実践センター主任代理）は、「険しく冒さなくても、アドベンチャーは身近にありますよ」と多くの指導者や親に語りかけます。

■身近な環境と安全

子どもたちは、日々、自分の回りの世界に目を向け、何かにチャレンジし、今の自分の限界を知ったり、次なる目標に辿り着こうとしたりしながら成長していくと言われます。とりわけ、自分の力ではどうしようもない自然という環境は、かつては子どもたち自身の遊び場、学び場として、身近にありました。私たちの諫早市は、大自然から身近な里山まで今も多く存在する美しいまちです。東京など大都市の方々から見れば、本当に羨ましい環境を持っているのです。

しかしながら、そういった環境で遊ぶ諫早の子どもたちを目にすることは稀です。例えば、こどもの城がある長田地区においても、かつては子どもたちが遊び、学んだ多くの林や川や田んぼがありますが、今、そこで遊ぶ子どもたちの姿はほとんど見られません。子どもたちが別の環境で健やかに育っているとするならば、それはそれで仕方ないことかもしれませんが…。

一方で、自然という環境は大きな危険を抱えています。

諫早の多くの大人の方々は、「昔は白木峰まで歩いてマツタケやアケビを採りに行った」、「池や川で自分たちだけで泳いで遊んだ」などと懐古的に語られます。そういった体験を積み、時には命を落としかねないほどの危険が潜んでいる場所であるかを熟知された方々は、やがて子どもたちだけで危険な場所で遊ぶことを禁止しました。さらに、子どもたちが人為的な被害に会う事件の発生も拍車をかけ、大人の目の届かない場所で子どもたちが遊ぶことは、急速に失われていきました。

こういった人々の生活の変化の中で、大人が見守るというある種の“安全”のもとに子どもたちは遊び、学ぶことを余儀なくされていったように思われます。場所はあるのに、そこで遊ばなくなった、遊べなくなったと言えるでしょう。

川で遊ぶ子どもたちの姿は少なくなった

アドベンチャー教育の手法を応用した「白木峰忍者塾」の活動

■チャレンジしながら新しい自分を迎える

さて、Adventure（アドベンチャー）に話を戻すとしましょう。

先述したアドベンチャー教育の手法は、可能な限りの危険を排除したうえで、かつての自然環境などでの遊びが持っていた、人間が成長するうえで重要な要素を身近に体験できるように開発されたものです。日本では、初めに宮城県の教育委員会が学校や社会教育の分野で導入し、やがて全国的に広がり、学校以外の地域づくり、職場の人間関係づくり、スポーツのチームづくり、はては非行やひきこもりなどからの自立支援のプログラムなどとして応用されていきました。

先述した難波克己先生は、こどもの城のボランティア養成事業の一つとして、カウンセリング研修の講師を努めていただきました。

難波先生は、Adventure（アドベンチャー）は、Advent（アドベント→迎える）とventure（ベンチャー→チャレンジする）という二つの言葉が重なっていると言われます。そして、「子どもの遊び、子どもの社会性や人間関係力を語る前に、私たち大人はどれだけ遊べるでしょうか」と多くの指導者や親に投げかけ続けておられます。「身近な人を苦手と決めつける前に接してみる、『できない』と決めつける前に接してみる、そういったことも一種のチャレンジで、実際にやってみるところから新しい自分との出会いができるかもしれませんよ」と研修に参加した方々に問いかけられました。

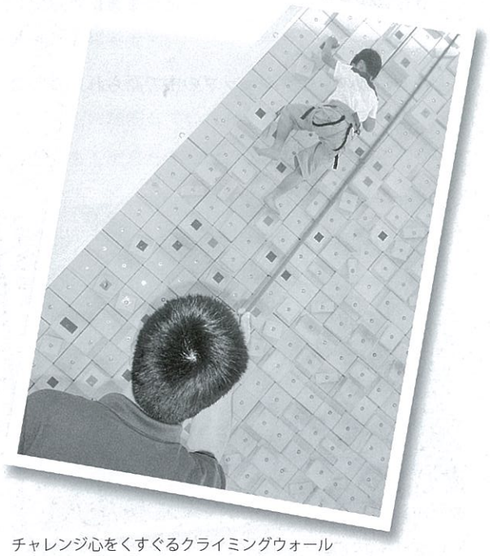
こどもの城では、かつてのダイナミックな環境での遊びが持っていたものには及ばずとも、こういった手法を取り入れながら、親の参加体験型の学びの場（ワークショップ）をＰＴＡなどとともに企画し、開館１年目から多くの団体を受け入れることができました。

子育てしながら、子どもとの関係をよりよく築きたい、子どもたちの現実の生活を少しでも変えてみたいという親は多く存在します。今後も、子どもたちが生きる力を培ううえで大きな影響を与える大人向けに、こういった取組を進めていきたいと考えています。

また、事前の予約なく利用できる屋外の施設として、３月には専用のコース（プロジェクト・アドベンチャーＥＸシステム）もオープンします。多くの大人も、アドベンチャーで新しい自分と出会っていただくことを目指します。

「親や先生たちは、僕たちにとって一番大きな環境じゃないかな。チャレンジしようとしない大人たちが、『ああしろ、こうしろ』と言っても僕らに響かないよ。」

ある市内の中学生のつぶやき



チャレンジ心をくすぐるクライミングウォール

Behavior 行動

Bの章では、Behavior（行動）をテーマにしてみます。

例えば、学校の勉強で、授業で聞いていたときにはわかっていたことが試験ではできなくなることなどがあります。友人と「今度、いっしょに食事に行こうね」と盛り上がったのに、お互いの日程が合わず、いつまでも「今度」のままになっていることなどもあります。このように、頭（心）の中と現実の行動が一致しないということは、日常の生活の中でよくあることです。

■やろうとすること

子育てにおいても、似たようなことがあるように思いますので、まず、親の行動についてふれてみます。

・子どもとゆっくり語る時間をとろうと思っても、家事に追われてしまった。
・休日に子どもを連れてどこかに行こうと思っても、仕事の疲れで眠りたかった。
・上手に叱りたいのに、つい感情のままに叱ってしまった。

などなど、親のワークショップの中で語られたことです。

本音で語り合った向山子ども会の
親のワークショップ

子どもたちの健全育成を目指して行われている子ども会やＰＴＡなどの地域活動でも、会議の出席者数が少ない、行事の参加率が悪いなどということはあるようです。頭の中で、やりたいことはたくさんあっても、体は一つなので、やりたいことができないことはあるのです。

そういう場合は、「そもそも、全部やることは難しいこと」くらいの気持ちで、やりたいこと（やろうとすること）に順位をつけてみてはいかがでしょうか。

こどもの城の運営協議会長を努められ、こどもの城でもボランティア活動をされている中村則子さん（長田町在住、小児歯科医・ＮＰＯ法人子どもの人権アクションながさき代表理事）は、夜に、親のワークショップに参加された方々に語りかけます。

「皆さんは、今夜ここに来るまでに、いろんなことをされたでしょう。お仕事をされている方は、職場の仲間に都合をつけてもらったでしょう。ご家族の夕食を作り、食べさせたでしょう。ご家族も、その時間に合わせて帰宅してくれたでしょう。それだけでも凄いことです。プログラムはそこから始まっているのですね。」

どうやら、大切なのは、「やること」よりも「やろうとすること」のようです。

■子どものDoingとBeing

次に、子どもの行動についても少しふれてみます。

こどもの城では、子どもたちの生き生きとした姿が毎日のように見られます。指導者がついたプログラムは、指導者のリードのもとに子どもたちが動きますが、自由に遊ぶ子どもたちは、解放的に動き回ります。

しかし、時には、望ましくない、好ましくない行為も見受けられます。

・赤ちゃんを抱いているスタッフを、突然背後から蹴る
・他の子どもにぶつかるように物を振り回す

利用される親の中には、こどもの城のスタッフに我が子の躾をしてほしいと期待している方もおられるようです。価値観が多様化した現代社会においては、躾ということは難しく、正直なところ、私たちスタッフも何が正解なのかはわからず、手探りでかかわることにしています。

私たちは、子どもたちが自分の様々な行為を他者から指摘されたり、叱咤されたりすることで、どうしたらよいのかと考える力を培うものと考えています。こどもの城では自分の責任で遊んでもらっていますが、スタッフはできるだけ禁止用語を使わずに、よりよい行動を促すように心がけています。このことはFの章でもふれることにします。

親のワークショップに参加する中村則子さん（左）

しかしながら、一つの基準として、上記のような他者の安全に影響を及ぼすような行為に対しては、時には周囲の大人も驚くくらいの強い警告を発し、叱ります。叱ったあとは、できるだけ修復の時を持つように心がけていますが、子どもを叱ることはとても心が痛みます。強く叱った時には、閉館後のスタッフミーティングで報告がありますが、時には叱ったスタッフがひどく落ち込んでおり、他のスタッフからのケアが必要な場合もあります。

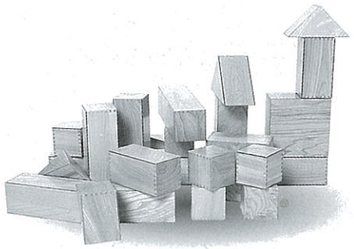
できれば、誰しも嫌な思いはしたくないところですが、子どもたちが他人から叱られることがなくなったとも言われる現代においては、私たちも勇気を持って叱ることにします。

一つだけ理解していただきたいことがあります。

子どもを叱るときには、私たちは、その子のやっていること（Doing）を叱っています。同時に、その子の存在そのもの（Being）を限りなく大切にしたいというメッセージを送っています。

やっていること（Doing）と「そこにいていいんだよ」という存在そのもの（Being）を分けた叱り方を今後も心がけていきます。

Communication
ふれあい



Cの章では、Communicationを「ふれあい」と意訳し、テーマにしてみます。

近年、日本の子どもたちの人とかかわる力が低下しているなどと言われます。その背景として、大人も同様であるということも言われます。

こどもの城は、様々な方が利用される施設ですので、利用者は必然的に他者とかかわる場面に遭遇します。仮に、子どもたちや大人の力が低下しているとするならば、こどもの城は、そういった力を高める一種のトレーニングの場と考えることもできそうです。

■言語によるコミュニケーションと非言語によるコミュニケーション

ところで、コミュニケーションには、言語によるものと、非言語（身振り、表情など）によるものがあります。会話など言語によるコミュニケーションについては、次のDの章で扱うとして、ここでは非言語によるもの、特に身体接触を伴うふれあいについてとりあげてみます。

お兄さんに抱かれて縄とび

こどもの城には、毎日のように子育て中のお母さんが赤ちゃんを抱いて、到着されます。横には、もう一人のお子さんがいて、手に荷物を持っています。受付でお名前を書いていただき、そこから子どもの靴を脱がせて、遊びスペースへ。寒い時期は上着を脱がせ、それをたたんで棚の中へ片付けて…。

そんな時、スタッフはできるだけ小さな方の乳幼児を抱くようにしています。子育ての経験がある方なら誰しも、赤ちゃんが重くて、「誰か、ちょっと代わって」と感じたことがあるのではないでしょうか。

子育ての支援を目指す施設は別として、「ちょっと代わって」子どもを抱いている場所というのは、意外に少ないものです。「最近は、怪しい人と思われるから、よそ様の子どもに話しかけられない」と話す方もおられます。このように、人とふれあうことが、かえっていろんなトラブルのもとになるかもしれないと考え、“よそ様の子ども”に手を出すことをタブー視する場合もあるようです。

こどもの城は、そこにチャレンジしています。

むしろ、「だっこ、チュー、こちょこちょ」を合言葉にして、子どもたちと直接的な身体接触によるふれあいを大切にし、利用者の方にも理解いただき、奨励しています。やってみるとわかると思いますが、長い時間、子どもたちとプロレスごっこをしたり、抱きあげたりするのは、かなりの体力と忍耐力が必要です。大抵の方はネをあげそうになります。スタッフも生身の人間ですので、「ちょっとタイム」と言って子どもたちに我慢をしてもらうこともあります。それでも、そういった直接的な身体接触のふれあいを期待して利用される方（特に、お母さん）も多くおられます。スタッフは、そういったお母さんの期待に応えるべく、体にムチうってがんばっています。

「よく考えてみれば、肉弾戦で遊んでくれるお兄さん、お姉さん、おじさんがいる場所って、今はここしかないんだよね。」　**あるお母さんのつぶやき**

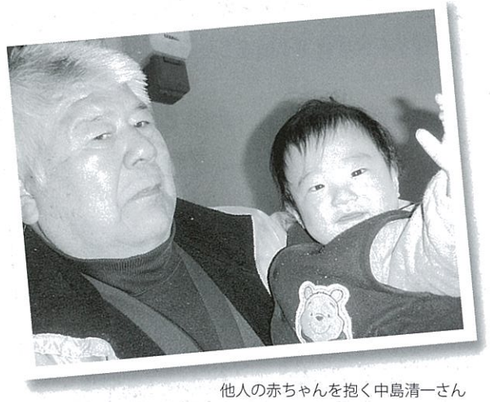
■中島のじいちゃん

この１年間で最も多く利用されたのは、「中島のじいちゃん」こと中島清一さん（長田町在住）で、４歳の男児と２歳の女児のお孫さんを連れて、それこそ毎日のように利用されます。実は、中島さんは、利用されるお母さんたちのお手本的な存在になっているのです。

ある日の中島さんとスタッフとの会話です。

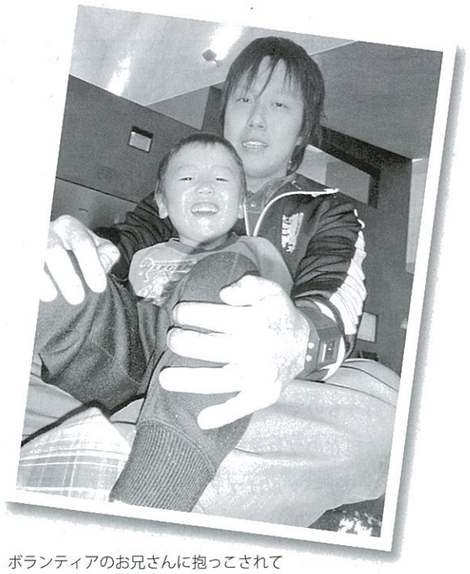
スタッフ：「じいちゃん、孫の面倒を見らんでよかとね？」（遊びスペースで横になっている中島さんに）

中島さん：「よかとぉ。ここは、他の親がおるけん。」



他人の赤ちゃんを抱く中島清一さん

中島さんの考え方を文字だけで伝えきれないこともあるかもしれませんが、一言で言えば、「他人の子どもを看る」、「それぞれが、できることをやる」ということです。



ボランティアのお兄さんに抱っこされて

中島さんのお孫さんたちは、とても活動的で、中島さんがずっと一緒にいることは難しいように思います。そこで、中島さんは、自分の孫たちの面倒は他人に看てもらって、自分は他の赤ちゃんをお母さんに代わって抱いてあげるのです。冬の活動で「焚き火」を実施しているとき、「お母さんたちに食べさせてあげて」と言って、サツマイモを持ってきていただいたこともありました。

「昔は、こうやってよその子を看たものさ」と中島さんは語られます。

中島さんが来られていないときに、「きょうは、中島のおじいちゃん来てないのかな」とつぶやくお母さんたちも増えてきました。中島さんから学ぶことも多く、人とかかわる力が低下してきたと言われる現代においては、かつて家庭や地域が担ってきた役割について考えさせられます。

音楽コミュニケーション報告書

長崎大学教育学部准教授：西田　治

月に２～４回、「音楽コミュニケーション」と題した参加型音楽ワークショップを行ってきました。プログラムは１回30分であり、未就学児の親子を対象とした「音楽でホッと一息、優しい音楽」、小学生の親子を対象とした「元気に音楽！リズムで遊ぼう」の二つのコースです。参加者は、事前に募集するのではなく、その場に居合わせた親子であり、不特定多数（20名から30名程度）を集めて行うものです。

現在のプログラム内容は、ドラムサークル、療法的音楽活動の２つを柱とて構成しています。ドラムサークルはファシリテーターの導きによって行うドラムの即興演奏、療法的音楽活動は楽譜を用いずに参加者を音楽に巻き込んでいく手法として、いずれも参加者主体でありながら音楽的スキルを問わずに行え、かつ即興演奏という要素が入っているという点で取り入れています。カラオケなどに合わせて歌ったり、踊ったりという活動ではなく、即興を重視した活動を行うのは、もっと音楽に自由に触れてほしい、普段は経験できないような音楽体験をしてほしい、という想いからです。

また「コミュニケーション」と題しているのは、「双方向性」を重視しているためです。「演奏する人→聴く人」という一方向ではなく、参加者全員が演奏者であり、聴き手である、そして、音楽上のやり取りが相互にある、という関係性のもと活動ができることを根底においています。また、毎回、親だけで演奏をして子どもはそれを聴いている、あるいはその逆、という場面を意図的に設けており、それは互いの音に耳をすますことを通して、互いの存在により目を向けてもらえるように、という想いをこめてのことです。

参加者からの感想は、楽しかった、温かい気持ちになれた、などのプラスの評価をいただいています。基本コンセプトは変えずに、今後も参加者主体のプログラムを絶えず開発しながら提供していきたいと考えています。

サウンドスケープ報告書

長崎大学教育学部准教授：西田　治

目で見る風景を「ランドスケープ」というのに対し、耳で聴く音の風景のことを「サウンドスケープ」といいます。目で見る風景と同じように、耳で聴く風景ももっと楽しめるようになったらどんなに素敵でしょう。そのきっかけづくりをしたい、との想いから本プログラムの実施にあたりました。

目を閉じて、今ここにある音に耳をすましてみます。車の通り過ぎる音、木々のざわめき、子どもの遊ぶ声…多くの音が折り重なり、まるで目で見る風景のように、耳で聴く風景がたちあらわれてきます。恐らく普段は視覚重視で生活をしている私たちにとって、目を閉じて耳をすます、というシンプルな活動の示唆するものは予想以上に大きいものです。そして、目を閉じて耳をすますと、季節ごとの匂いや風が頬をかすめる感覚などにも鋭敏になっていきます。つまり本プログラムは、音を聴くこと自体を深めていくことを中心としますが、それはマニアックに耳だけを鍛えることを目指すものではありません。耳をすますということを切り口として五感のバランスを取り戻すこと、あるいは音楽の楽しさを再発見することを目指しています。

今年度のプログラムの実施状況以下の通りです。

○サウンドスケープ　大人編

…ボランティアを対象としてサウンドスケープの概論を体験的に知るプログラム

○サウンドスケープ　子ども編（連続講座）

…同じ参加者に対しての３回連続講座

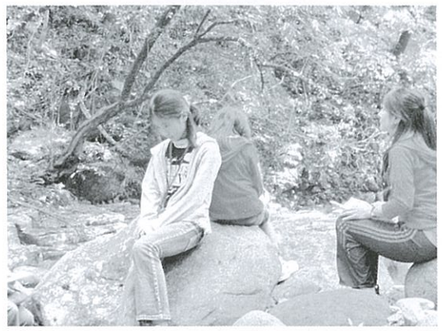
① ９月26日（土）音の宝探しゲーム

② 10月10日（土）水の音

③ 11月７日（土）音地図作り

○サウンドスケープ　子ども編（単発）

…高来幼稚園の園児を対象にして、絵本を用いたプログラム



Dialogue
対話・語り合い

Dの章では、Dialogue（対話）をテーマにしてみます。

こどもの城では、毎日のように、スタッフと利用された保護者との語り合いが見られます。

話題は、当然、子育てのことになります。子どもの発達のこと、障害のこと、取り巻く地域社会のことなど、スタッフは利用者の話に聴き入り、まるで即興のカウンセリングが開催されているかのようです。

■つかみ・ひきだし

このような語り合いには、前段階が必要であると思います。

すでにスタッフの名前を知っている常連の利用者ならば、スタッフに語りかけてくれ、日常会話から自然な形で始めることができます。逆に、スタッフが名前をおぼえていて、語りかける場合もあります。しかし、あまり顔なじみでない方が積極的にスタッフに語りかけることは若干の遠慮があるかもしれません。

そこで、スタッフはある種の“仕掛け”をします。

Cの章でふれたように、まずは赤ちゃんを抱いたり、子どもたちと遊んだりしながら、相手が語りかけやすい雰囲気をつくるように努めています。

「どこから来られたのですか？」

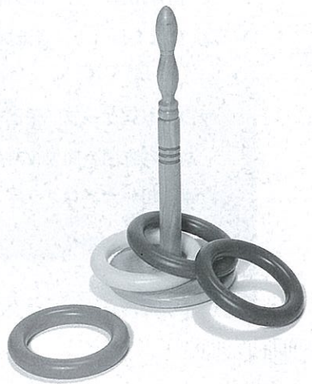
「おやっ、この子の顔は見たことがありますよ。」

「こらこらぁ、お母さんから離れないとお母さんがきついんだぞぉ」

というような具合です。

このように、語り合いの前には、相手をつかむ、ひきだすという過程を大切にしています。

相手がこのようなふれあいを求めていないと感じた場合は、そっとその場を離れますが、こどもの城は、これからも自然な形で対話ができるよう語りかけを大切にしていきます。



■よくある対話中のテーマ

即興のカウンセリングのようだと書きましたが、語り合いの中でよくあるテーマは次のようなことがらです。

- 親以外の人が面倒を看る機会、またはその看方
- 複数の子どもがいる場合の対応
- 幼児期の自然体験の重要性
- 日常の子どもの生活
- 発達の段階と個人差
- こどもの城で実施している活動の意図

Experiences 体験

Eの章では、Experiences（体験）をテーマにしてみます。

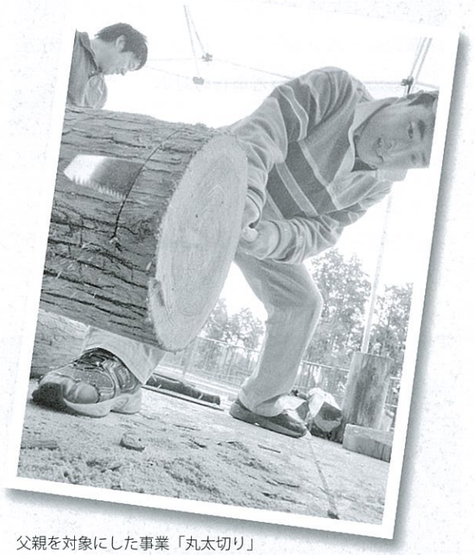
■子どもたちの体験活動の調査

文部省（当時）は、平成11年度の生涯学習審議会の答申で、自然体験や生活体験が豊かな子どもほど、道徳観・正義感が充実しているという内容を発表しました。参考にしたデータは、日本の子どもたちの体験活動等に関するアンケート調査（平成10年度に実施）でした。

いくつか例をあげてみます。その調査の項目例に対して「少しある、ほとんどない」と回答した子どもの割合です。

・「チョウやトンボ、バッタなどの昆虫をつかまえたこと」
　→　男子39%、女子58%
・「ナイフや包丁で、果物の皮をむいたり、野菜を切ったこと」
　→　男子71%、女子47%
・「大きな木に登ったこと」
　→　男子72%、女子83%
・「赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたこと」
　→　男子95%、女子89%

親子でものづくり体験



父親を対象にした事業「丸太切り」

体験とよく似た言葉に経験というのがありますが、体験活動を推進している指導者の方々は、「体験の積み重ねが経験になる」などと言われます。子どもたちは、体験を積み重ねることによって、生きていくうえで大切な様々なことを獲得していくとも言われますが、「少しある、ほとんどない」と回答した子どもたちは、積み重ねていない子どもたちだと言えるでしょう。

さて、この調査で問いたいことは、もう一つあります。

それは、アンケートの対象となった当時の子どもたちのことです。調査対象は、全国の小学校５年生と中学校２年生でした。平成10年度の調査ですから、当時の小学校５年生は22歳で、中学校２年生は現在25歳になっています。もう立派な大人となり、中には親になっている方もおられます。

ナイフや包丁で野菜を切ったことのあまりなかった71%の男子と47%の女子は、今や切れるようになったのでしょうか。赤ちゃんのおむつをかえたり、ミルクをあげたことのあまりなかった95%の男子と89%の女子は、今はできるようになったのでしょうか。「そんなことは自然にできるようになるものさ」と楽観的に考えてもいいかもしれませんが、もしも体験を重ねずに親になり、そこに周囲の支援が得られない方がおられるとしたら、21世紀を生きていく子どもたちのことが心配です。

このような現代的な課題から、こどもの城は、虫取り、木登り（「白木峰忍者塾」というプログラムの中で実施）などの自然体験活動をはじめ、様々な体験の機会を提供するように努めています。中には、複数回にわたって参加する家族もいますし、小学生や中学生がボランティア体験に訪れ、赤ちゃんを抱っこしたり面倒をみたりする子どもたちも数名います。

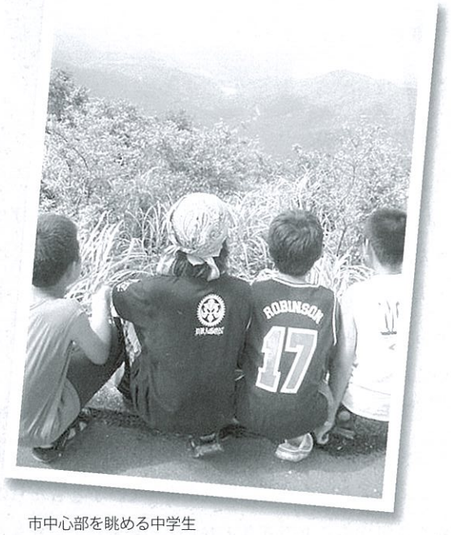
■お手玉

関連する話題として、こどもの城のスタッフが利用者の方々に「お手玉」を手渡して、やってみてもらったところ、３つのお手玉を操ることができるお母さんはほとんどいません。その点、おばあちゃん世代の方々は、とても上手に操ることができます。中には、片手で３つ操作したり、一つを放り上げている間にもう二つのお手玉を手元で持ち替えたりする凄腕の方もおられます。

「おばあちゃん、凄いね。でも、娘さん（お母さん）はできないのね。」

「私が、この子（お母さん）にさせんやったもんねえ。」

たかがお手玉かもしれませんが、このような遊びは何度も体験を積み重ねてできるようになる類の遊びです。体験を積み重ねた分だけ、できるようになったときの喜びはひとしおでしょう。今、子どもたちがやっている遊びの中で、このような「すぐにできない（長い時間をかけてできるようになる）」類の遊びはどれだけあるでしょうか。



市中心部を眺める中学生

「試行錯誤や切磋琢磨ができる体験は、経験知を体得し主体性を育む機会と成長実感を青少年に与え、新たな意欲を喚起し、青少年の自立への意欲を高め行動を促すという高い教育効果をもたらす。このため、大人側には、青少年の体験を通じた試行錯誤や切磋琢磨を見守り支える許容力と忍耐力が求められる。」

平成18年中央教育審議会答申より

Failure 失敗

Fの章では、Failure（失敗）をテーマにしてみます。

こどもの城のものづくりスペースには、次のようなことが書かれています。

「子どもたちにたくさんの『失敗』をさせてあげてください。」

大人の人が手を出して作品を完成させるよりも、子どもたち自身が失敗を重ねていく中で何かを獲得していくことを重視した呼びかけです。

これは、「できた、できなかった」などという結果よりも、「やろうとした（している）、どうしたらうまくいくか」などの過程に視点を当てて、子どもたちの成長を見守ろうという考え方です。もちろん、できたときはともに喜びを分かち合います。

■失敗しないように…

こどもの城は、低年齢児向けの遊具などを置いていますが、一方で、中学生、高校生、大学生などを受け入れ、心について考えるプログラムを実施しました。思春期から青年期にあたる彼らと語ってみると、周囲の大人に「失敗しないように」と言われ続けた幼少期を過ごした人も多いようです。時には、失敗によって自分が傷つくことを極度に恐れ、不安になる方もおられるようです。

そこで、彼らとともに失敗を楽しむゲームを体験してもらったところ、「失敗してもいいんだと考えることができて、何だか楽になり、やる気が沸いてきた」などと感想を語っていました。本来は、幼少期にたくさんの失敗を積み重ねるべきことなのかもしれません。

■誘いかける先生たち

11月に、教師や民間の指導者などで構成された九州アドベンチャー教育研究会（代表：井上恭子先生、西小倉小学校教諭）の方々がこどもの城を訪れ、子どもたちと遊び、保護者の方々と語っていただきました。井上先生は、子どもたちの失敗を見守る指導を心がけておられ、子どもたちに語りかける言葉は、できるだけ禁止用語にせず、よりよき行動を誘いかけるよう呼びかけているそうです。

例えば、よく学校には「廊下を走らない」という表示がありますが、井上先生の学校では「廊下を歩いて行こう！」とあり、上級生が自分たちで「廊下を歩いて行こう体操」を創作し、下級生に教えているそうです。

同研究会の方々が子どもたちと遊んでいる姿を見て、多くの保護者が、「あの先生たちのかかわり方は何かが違いますね。うちの子があんなに生き生きしているのですから。」などと語っておられました。子どもたちの目が輝くことと周囲の大人が誘いかけることは何か関係があるのかもしれません。

■兄弟でチャレンジ

子どもたちの失敗に関するエピソードを一つ紹介します。吉田慧君（諫早中１年、原口町在住）と慶冴君（上山小５年、同）の兄弟は、自転車でこどもの城まで往復するということに２度チャレンジしました。

夏休みに１度目のチャレンジを実施した２人は、帰途で、慶冴君がブレーキの不具合により転倒するという事故を起こし、両腕に広範囲な擦り傷を負いました。この時は、発見したボランティアの方から連絡を受けたこどもの城のスタッフが病院に搬送したのですが、両親は子どもたちを責めることなく、連絡していただいたボランティアの方やスタッフに感謝の言葉をかけられました。

その後、秋になり、２人は懲りずに（？）もう一度同じチャレンジを企てました。母親のめぐみさんはその時のことを語ります。

「昔の私だったら、きっと『ダメ！』と言ったでしょう。けれど、子どもたちが自分で決めて、自分で行動を起こしたのだから、そのことを大切にしてあげたいと思いました。実は、こどもの城のワークショップに参加してから、こういう風に考えるようになったのです。確かに道中は心配ですが、いずれは独り立ちしてほしい子どもたちですから、覚悟を決めて、笑顔で送り出しました。やり遂げた後の子どもたちの顔を見て、行かせてあげてよかったと思いました。」

擦り傷を負いながらも２度のチャレンジをした
吉田慶冴くん

実は、この２度のチャレンジについては、こどもの城のスタッフは事前に何も知らされておらず、かなり無茶なことをされたと感じますが、「無事に帰宅しました」という連絡を受けて安心するとともに、２人のチャレンジ達成をともに喜びました。

なお、今後このようなチャレンジがあるときは、事前に相談していただき、スタッフが道中に付き添うなどの支援ができれば、危険度が少し軽減できるかなと思います。

世の中には、取り返しのつかない失敗もあるかもしれません。「やってはいけないこと」を厳しく教えていくのも大人の大切な役割ですが、よく考えてみると、そのためには子どもたちが「やってはいけないこと」を一度やってしまう過程が必要です。大人は、子どもたちがやってしまう失敗に対して、少しだけ寛大になってもいいのではないかと思います。言い方を変えれば、子どもたちにも失敗しながら成長する権利があるという考え方もできるかもしれません。

Generation 世代

Gの章では、Generation（世代）をテーマにしてみます。

世の中には、団塊の世代、新人類など、いつ人が生まれ育ったかによって世代という形で大きく分類される言葉があります。生まれ育った時によって分類するということは、特に子ども時代の生活環境の影響によって、生き方や考え方に違いがあると考えられます。

Eの章（体験）でも書きましたが、目に見えるものとして、お手玉ができる世代とできない世代の違いなどがありますが、今、一昔前の親世代の方々のご活躍が必要だと考えられないでしょうか。

■愛　着

一方で、世代の違いによらず、発達心理学などで言われる、人が育っていくうえで人生のそれぞれの時期に獲得すべきことなどもありますが、こちらはある程度、普遍的なものだと考えられます。

第19期日本学術会議「子どものこころ特別委員会」報告書は、少子化の進行による親の役割の変貌などの背景から、子どもを取り巻く諸問題の遠因を考察し、具体的な対策を示しました。

特に、家庭教育や親子関係等に関わる提言等として、「子どもの対人関係力や社会的適応能力の育成のためには適切な『愛着』形成が重要である」とされ、乳幼児期からの親子関係をはじめとした人間関係が重要であるとされています。

愛着とは、相手と一緒にいることを望み、一緒にいることで大きな安心感、満足感を感じられる関係で、「相互的な関係」、「情緒的満足感」、「身体接触的関係」が不可欠の要素とされています。

■こどもの城スタッフのチャレンジ

こどもの城では、これらの提言内容を考慮し、中でも身体接触的関係を意識した対応を心がけています。利用する子どもたちにとって、こどもの城のスタッフは家族ではありませんが、身近な他者としてかかわりを持つように努めています。同時に、そのことは、こどもの城の特徴ともなっています。

ともすれば、類似施設では利用者の自主性を尊重し、「お客様には手を出さない」という考え方で運営されているところもあるようです。また、一昔前の親世代の中には、「最近は『余計なことをしないで』と言われそうで、人様の子に（時には自分の孫にも）かかわることを控える」という方もおられます。

確かに、良かれと思ってかかわったことが、かえって相手の迷惑になったり相手が嫌な思いをしたりするということは現実にありますし、その思いは自分に跳ね返ってきます。嫌な思いをするくらいなら、かかわらないでおこうと考えるのも理解できます。

しかしながら、かかわらないでおこうとする考え方と、子どもたちをめぐる現代的な諸問題には若干の関係があるように思えてなりません。人とかかわることは、恥ずかしさや怖さを伴うこともありますが、問題の解決には少しだけ勇気を持った行動も必要ではないかと思います。

実際に、こどもの城を利用されるお母さんたちからは、「こどもの城のスタッフに、父親、身近なお兄さんやお姉さんなど、ある種の家族の役割を求めています。」と言われることがあります。愛着形成を構成する要素のようなかかわりが、ニーズとして潜在化されているかもしれないと考えられます。

したがって、余計なことと言われるかもしれませんが、少し照れたり怯えたりしながら、こどもの城は利用者にかかわるチャレンジを今後も継続していきます。

地元の方と農業体験で知恵を学ぶ

また、一昔前の親世代の方々が持っておられる生活上の知恵などは、現代の親や子どもたちに必要な宝箱のようなものだと考えられます。そういった世代の利用者の方が、こどもの城のボランティアとして活動されている例もあります。社会全体で子どもたちを見守り育てていくため、このような勇気ある行動が広がってほしいと願っています。

なお、参考までに、第19期日本学術会議「子どものこころ特別委員会」報告書で示された改善策、提言等の内容は以下のようなことです。こどもの城は、これらのことを考慮した取組を今後も模索していきます。

- 乳幼児のテレビなどメディアとの接触においては慎重であるべき
- 大人は子どもとのコミュニケーションを充実させる必要があり、特に聞き上手で、褒めることを心がける必要がある
- 幼児期に虐待を受けた子どもは、自分の子どもを虐待する可能性が高い。したがって、虐待の連鎖を断ち切る必要がある
- 不登校児が出しているＳＯＳ信号を見落とさないこと
- 子どもには、できるだけ実体験をさせるべき
- 社会は、あらゆる計画・設計において子どもの存在を視野に入れることとし、憲章でそれを保障することも視野に入れるべき

３世代で植樹

利用状況

総利用者数 140,121人（2月末現在）

◆月別利用者数

利用月	利用者数
3月(20日～31日)	13,410人
4月	21,657人
5月	22,558人
6月	10,191人
7月	12,262人
8月	14,557人
9月	11,180人
10月	11,312人
11月	6,515人
12月	3,200人
1月	6,515人
2月	6,764人

1 平日・土日祝日における利用者層の傾向

【表1】

	乳児	幼児	小学生	保護者	祖父母
平日	◎	○	―	◎	△
土日祝日	○	◎	◎	◎	○

記号（割合が、◎とても多い、○多い、△普通、―少ない）

- 利用者層は、【表1】のような傾向にある。
- 平日は、母親と乳幼児（1人～2人）連れの利用者が多く、乳児の母親には、「土日は多いので利用を控える」と言われる方も多い。
- 日曜日は、平日や土曜日と比較して、父親の利用が多い。
- また、土曜日や日曜日（特に、午後）は、諫早市外の利用者が多い。
- 平日は、「父親の仕事が休みなので、保育園や幼稚園を休んで来た」という利用者も時々見られる
- 平日は、小学生はほとんど来ない。
- 祖父や祖母と孫（1人～2人）連れの利用者もよく見られる。（特に、盆前後の時期は多く見られた）
- 利用のきっかけで際立って多いのは、口コミと子育て情報誌。

2 複数回利用者（リピーター）の傾向

- 複数回利用者（リピーター）は、平日においては8～9割を占める。
- 中には、10回以上利用された方もおられ、週に1～3回、利用される方もおられる。
- 複数回利用者（リピーター）には、職員とのふれあいを求めて来られる乳幼児と母親が多い。

3 時間帯別入館傾向

【表2】

時間帯	平日割合	土日割合
9:00～10:00	4%	2%
10:00～11:00	34%	12%
11:00～12:00	14%	13%
12:00～13:00	12%	16%
13:00～14:00	13%	20%
14:00～15:00	16%	23%
15:00～16:00	7%	9%
16:00～17:00	0%	5%

※7月のデータ

- 時間帯別入館傾向は、下記【表2】のような傾向にある。
- 土日の開館直後は、人気メニューの「10mの壁にチャレンジ」等を実施し、早い時間帯の来館を奨励している。

4 傷病等の様子

- 救護室で処置をした件数は、28件（2月末現在）
  （一時休養、打撲、擦過傷、虫刺され）
- 現場で応急処置をした件数は、1件
  （6月28日（日）雨、15:30頃、ブランコ付近で転倒し、市内の小学校1年生が骨折し、職員による応急処置後、職員の付き添いのもと、母親の自家用車で病院へ搬送）

ボランティアの活動状況

登録者数	(リスクマネジメント研修受講後)	50人
延べ活動人数		566人

※2月末現在

ボランティアの方々による活動の共通認識
「できる人が、できるときに、できることを」

1 ボランティアの活動内容

① プレイリーダー的な活動
いっしょに遊ぶ、遊びを見守る、利用者と語る

② インストラクター的な活動
自分たちでまたはスタッフとプログラムの企画・実施または補助

③ その他の活動
広報活動、環境整備活動等

2 ボランティアの研修

① 毎月19日（19時から）のつどいの様子
…閉館後にボランティア希望者が集まり、話し合って実施している

（ア）こどもの城からの情報提供
当月20日～翌月末までの申し込み団体及びその日利用者向けの催しの紹介

（イ）ボランティアどうしの情報交換
ボランティア主催のイベントの呼びかけ
現況報告

（ウ）自主研修
体験活動に関する学習会

② ボランティア等養成事業
◆ 安全に関する研修（リスクマネジメント研修）
◆ 周辺の自然環境に関する研修
◆ カウンセリング研修
◆ 企画研修
◆ 体験活動を支援するための研修（ファシリテーション研修）

こどもの城におけるボランティアの考え方

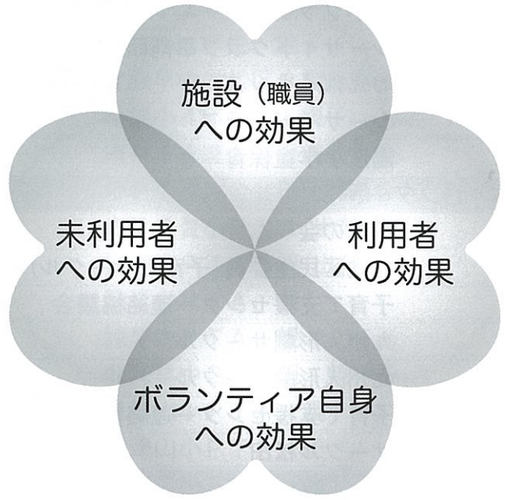
■ボランティア活動とは…
個人の自由意思に基づき、その技能や時間等を進んで提供し、社会に貢献すること

■基本的理念【自発性・無償性・公共性・先駆性】
今後の社会の動向に対応した生涯学習の振興方策について
（生涯学習審議会答申、平成４年）

■ボランティアがいることの４つの効果

〈参考〉「地域に発進!!ボランティア1・2・3 児童館のボランティアコーディネート」
国立総合児童センターこどもの城

・運営サポートで、「できること」が増える
・プログラムの拡充・深化が期待できる



・市民としてできること（私にもできること）に気づく

・子どもたちが様々な人と出会える
・大人が子どもたちに対する意識を高めることが期待できる

・健全育成活動に対する意識が向上する
・ボランティア自身の自己実現の場になると期待できる

申込み団体一覧

（平成21年3月～平成22年2月）

利用日	団体名
◆保育園等	
3月28日	多良見保育園
5月14日	ほなみ保育園
5月14日	サンタの家保育園
5月16日	長田くみあい保育所
5月30日	有喜保育園
6月26日	ともしび保育園
7月24日	めぐみの園
1月20日	ふたば保育園
◆幼稚園	
6月17日	北諫早幼稚園職員事前研修
6月26日	諫早清水幼稚園
9月18日	北諫早幼稚園
11月10日	高来幼稚園
◆学童保育	
3月25日	あそびの家共同保育
4月26日	わんぱくキッズ
6月20日	真城っ子ハウス
7月23日	北小クラブ事前研（出前）
7月28日	わんぱくキッズ事前研（出前）
8月 6日	北小クラブ
8月22日	シーサイドクラブ事前研（出前）
8月25日	わんぱくキッズ
8月26日	シーサイドクラブ
8月27日	湯江小学童保育
◆子育てサークル・センター等	
4月15日	絵本の会
5月12日	北地区民生委員（子育てサークル）
5月27日	子育て支援センター連絡協議会
8月22日	九州人形劇サークル
8月23日	九州人形劇サークル
10月30日	子育て支援センター連絡協議会
12月23日	サークル松田
◆ＰＴＡ	
3月26日	上山小６年１組
5月15日	市ＰＴＡ連合会母親委員会
5月23日	森山東小３年生、親・子
6月 4日	上山小ＰＴＡ
6月 6日	上諫早小１年生、子
6月21日	小野小１年生、親子

利用日	団体名
◆ＰＴＡ	
7月 4日	上山小５年生、親・子
7月18日	真城小６年１組、親子
7月22日	森山東小ＰＴＡ
7月23日	明峰中ＰＴＡ事前研
8月 1日	小長井中２年２組（出前）、親子
8月 4日	真津山小６年１組、親・子
8月 6日	諫早中ＰＴＡ教養部（出前）
8月 5日	明峰中ＰＴＡ事前研
8月22日	森山東小１年生、親・子
8月25日	有喜小６年生（出前）、親
8月26日	有喜小５年生（出前）、親
9月 3日	上山小２年ＰＴＡ事前研
9月12日	上山小１年生、親・子
10月 3日	明峰中３年３組、親子
10月10日	小栗小２年３組、親子
10月11日	西諫早中３年５組、親子
10月12日	有喜小６年生、子
10月24日	上山小４年生、親・子
10月24日	御館山小５年２組、親・子
10月31日	諫早中学校区５校連絡会
10月31日	諫早中３年１組、親子
11月 7日	西諫早小３年１組、親子
11月 7日	上山小２年生、親・子
11月 8日	遠竹小１年生、親子
11月18日	北諫早中学校区３校連絡会（出前）
11月21日	小栗小４年３組、親子
11月25日	市ＰＴＡ連合会母親委員会
11月25日	市ＰＴＡ連合会母親委員会（ブラッシュアップコース）
12月17日	みはる台小ＰＴＡ（出前）
1月20日	諫早中ＰＴＡ、親（出前）
1月21日	諫早中ＰＴＡ、親
1月26日	諫早中ＰＴＡ、親
1月31日	北諫早中２年３組、親・子
2月 6日	真津山小ＰＴＡ、親
2月11日	真津山小ＰＴＡ、子
2月20日	西諫早小５年生、親・子
◆学校	
3月31日	長崎日大デザイン美術科
4月 9日	長崎日大中学校１年生
5月12日ほか	長崎ウエスレヤン大学
5月30日	西諫早中学校サッカー部
6月10日	北諫早中学校テニス部

利用日	団体名
◆学校	
6月18日	諫早高校野球部
7月 2日	諫早養護学校(中等部)
7月 7日	諫早養護学校(中等部)
7月 8日	諫早高校野球部
8月11日	諫早高校ソフトボール部
8月26日	市教員生活科・総合科部会研修
9月 9日	長崎大学教育学部(ボランティア研修)
9月16日	虹の原養護学校(小学部)
9月26日	鎮西高校教員研修
10月14日	諫早養護学校(小学部)
10月14日	諫早高校ソフトボール部
10月20日	活水女子大学子ども学科１年生(出前)
11月28日	活水女子大学子ども学科１年生
12月 4日	長田中学校人権教育(出前)
12月12日	長崎大学医学部
12月26日	長崎日大高校デザイン美術科
1月 7日	鎮西高校卓球部
2月27日	活水女子大学子ども学科３年生
◆青少年団体等	
4月 3日	諫早こども劇場
4月26日	福田町子ども会
5月16日	中平田子ども会
5月22日	向山子ども会
5月30日	たんぽぽ隊(知的障害児団体)
6月14日	ガールスカウト長崎県第１団
7月17日	桜ヶ丘子ども会(栄田)事前学習
7月17日	向山子ども会(小船越)事前学習
7月28日	有喜地区子ども会育成連合会
7月30日	向山子ども会
8月 4日	桜ヶ丘子ども会
8月13日	ボーイスカウト諫早第１団
10月 2日	高来地区健全育成会(出前)、親
10月17日	白木峰をみどりにする会
10月25日	高来地区健全育成会、親
11月28日	高来地区健全育成会、親子
◆その他	
4月 4日	デイケア・ケイコム
4月 8日	諫早市職員課（新規採用者研修）
4月17日	母子保健推進員会
5月 8日	長田地区民生委員
5月19日	いさはや国際交流センター
5月31日	長田地区婦人会

利用日	団体名
◆その他	
6月10日	市女性防火クラブ連絡協議会
6月24日	多良見自治会長会
7月28日	飯盛公民館こども講座
7月29日	県都市教育長協議会視察
8月 7日	平和を考える集い・企画調整課
8月 9日	久山台ニュータウン自治会(出前)
8月23日	ＩＯＮＡ英会話教室
8月27日	長崎県社会福祉青年経営者会
9月 3日	真津山地区民生委員児童委員協議会
9月12日	県森林のつどい
10月 2日	こども医療福祉センター
10月 9日	市職員新任研修
12月13日	長崎県手話サークル連絡協議会(出前)
2月14日	市内ライオンズクラブ６団体
◆実習受入れ	
7月28日～31日	教員１０年研修(諫早養護学校、１名)
8月16日～30日	長崎ウエスレヤン大学インターンシップ(１名)
8月18日～21日	長崎純心大学インターンシップ(１名)
8月25日～28日	教員１０年研修(森山中学校、１名)
9月 8日～11日	長田中学校２年生職場体験(２名)
◆行政等視察受入れ	
5月26日	長崎県議会総務委員会
6月30日	兵庫県南あわじ市議会
7月29日	長崎県都市教育長協議会
10月14日	福井県鯖江市議会
11月13日	福岡県行橋市議会
11月19日	北海道釧路町議会
12月20日	滋賀県大津市議会
1月28日	佐賀県児童館連絡協議会
2月 5日	長崎県市議会事務局

【講師依頼】

長崎県プロジェクトワイルド協会
久留米ネイチャーゲームの会
福岡県立社会教育総合センター
山形県神室少年自然の家(文部科学省補助事業)
島根県立生涯学習センター
山形県神室少年自然の家(文部科学省補助事業)
大村市ＰＴＡ連合会
中国四国地区青少年教育施設職員研修

KODOMO NO SHIRO

こどもの城　実績報告書　Vol.1　　発 行／平成22年３月 諫早市 こどもの城
〒859-0307 長崎県諫早市白木峰町827-2
TEL.0957-24-8017　FAX.0957-24-8016

白木峰高原こどもの城　検索